# 落書とからくり

山田和人

からくり研究資料の有効性は、からくりの動態把握にあり、人形の瞬時の変化と変相を実体的にとらえられるかどうかにかかっている。もちろん、からくりは、遣い手が見えないところで人形が自動的に動いているように演技することに本質があり、人形が仕掛けによって変化、変相する瞬間をとらえることができなければ、資料価値は下がる。その意味で、資料価値の高い順に資料を掲げてみる。

一、現存からくり及びその映像・写真資料
二、からくり関連の絵本、絵尽し、番付の絵と本文
三、からくりの図解・解説などの概説書
四、人形浄瑠璃・歌舞伎の挿絵と本文
五、浮世草子、滑稽本、黄表紙、読本などの挿絵と本文
六、双六などの遊戯資料
七、芸能記録

これら以外にも、浮世絵や雑俳・狂歌なども加えることができる。とは言え、からくりは、個々のからくり研究にとどまらず、文化史的な裾野の拡がりを持っているために、多様な研究資料の発掘に取り組む必要がある。

今回、とりあげるのは、落書である。文学研究の側から近世の落書を取り上げた先行研究はそれ程多くはない。そのために落書についても形態的に整理をした上で、落書に現れたからくり関連記事を紹介し、これをからくり研究資料として、どのように位置づけることができるかを検証する。同時に、落書が制作される時に下敷きにしたからくり関連資料をいかに利用していったのか、明らかにできる可能性がある。その点もあわせて探っていきたい。なお、取り上げるのは江戸の落書であり、竹田からくりの江戸での人気を推定する資料にもなってくる。

本稿では、からくり研究の視点から、落書について検討を加えたい。具体的には、『江戸時代落書類聚』（以下、『落書類聚』）に掲載されている落書を対象とする。①

## 一

落書は、基本的に社会諷刺であり、多くの人びとの関心に応えることが前提になっているために、大きな事件や出来事を素材としている。「社会批判、政治批判、人物批判、世相批判②」の意図を有する匿名の文辞である。その意味で、落書では、何をいかに取り上げ、表現するかが第一の関心事であり、そのためにどのような趣向を構えるかを競い合うことになる。大きな事件や出来事を扱うために、実に多様な趣向が凝らされていた。参考までに、『落書類聚』から、落書の形態をピックアップしてみると、次のようなものが目につく。ただし、その形態は実に多種多彩であり、すべてを網羅するものではない。

狂歌（落首）狂詩、六歌仙・百人一首・八景・三夕・長歌など
歌謡（大道芸含む）、大黒舞・ちょんがれ・鹿島事触・役払・万歳五大力・童謡など
謡曲、道成寺・善知鳥・兼平・八嶋・江口・楊貴妃・盛久・鉢木・船弁慶・田村・自然居士・忠度・頼政・東北・邯鄲・猩々・高砂など
歌舞伎、勧進帳・忠臣蔵・傾城無間鐘・役者評判記など
番付、芝居番付・相撲番付など
口上、物売り・からくり口上・見世物口上（化物）・軽業口上など
献立、茶懐石献立など
いろは歌、引札、漢籍、雑俳、なぞ、御聞、捨札、落噺など

今回取り上げるのは、そのうちの口上のなかの、からくり口上を当て込んだ落書である。

『落書類聚』のなかから、該当する落書の見出しを巻別に掲げると次の通りである。

巻之八「焼田口上」「焼田からくり」「やけた口上言立」
巻之九「竹田口上」
巻之十四「竹田出水大がらくり」「八百屋お七からくり口上」「大がらくりふし穴よりのぞき見」（以上、『落書類聚』上巻）
残編巻之四「竹田口上」（『落書類聚』下巻）

以上が、からくり口上を当て込んだ落書である。明和の大火と田沼意次とその政策批判が主な内容である。

本稿では、明和九年の大火を当て込んだ巻之八所収の落書を取り上げる。大火の被害を竹田からくりの口上になぞらえて、制作した

落書である。

今回、巻之八所収のからくり口上を用いる理由についても触れておきたい。

実は、『落書類聚』に収められた落書を見ていくと、巻之八所収落書が、『落書類聚』のうちで、絵が含まれた落書としては初出である。本来、落書には挿絵が含まれることは比較的少ないので、何らかの事情が拝察できるのではないかと想定される。右に掲出した八点の口上のうちで挿絵が含まれているのは、巻之八の最初の二点のみである。しかも、最初のふたつには相似した挿絵が描かれており、落書を制作していく時に下敷きにしたからくり関連資料を指摘できる可能性がある。この二点において、落書研究における表現、典拠に関わる問題提起ができるのではないかと考えた。その他の落書については稿を改めて言及したい。

## 二

以下に『落書類聚』所収の当該本文を掲出する。

「焼田口上」

東西〳〵、高ふハ御座りますれども、是より申上まする。元祖焼田火元之義、明暦以来初て御当地にて御目にかけまする。

御目通におきましたる細工之義ハ、御江戸八百八町の風景に御座りまする。先最初ハ、行人坂より焼出しまする辻風、つむじの様に焼まする。一旦ハしめり、夫より広尾合羽干場に火移りまする。川を越ましてたちまち五口六口と別れ、土器町より西の窪をなぐり、夫より大名のいらか伝へ、諸侯権門がた丸焼、取分明神湯嶋仁王門伝法院へうつりまして、火の中より顕れまする。丸山より燃上り、吉原ハ三度もんどりをうたせまする。浅草の並木を伝へ、尻ハ千手の蔵までも残りなく焼まして、夫より北風と替り、八百八町炭にいたしまする。明ヶの烏と一同に御ひいきの役者共、木場へ立退まする。夫より小雨をふらせ、東北風に替り、惣体幅一丁につもり二十里余の野原となりまする。火消ハなし、水ハなし、焼たる者ハ乞食となり、焼ざるものも焼たるにおとり、末にハどろぼうに御気を付られませう。此上何とばし御座りませふ。

「焼田からくり」

東西〳〵、扨かざりすへましたるハ、南風目黒寺と申からくり、所々へ火を付て御らふじませ。

先最初、口上に随ひ焼出しまする躰、白鉄台より西の久保、あなたの桜台へ飛うつりまする。チヤン〳〵カチ〳〵チヤン〳〵。人間がきもをつぶしまする。さもけつかうに立並びたる大名屋敷、残らず灰となりまする。見付〳〵橋ゝ焼落ますれバ、北風と変り。東北風と変りますれバ、町屋もことごとく火となりまする。持出したる道

具共御気を付ませう、はるかあなたへ見へまする浅草寺、御堂より観世音、雨をふらせまする。目黒より巣鴨の果まで原となりますれバ、御惣客様への御暇乞。チヤン〳〵カチ〳〵。チヤンカチチヤンカチ〳〵。

それぞれの落書の本文中に口上人の姿が描かれており、その前後にからくりの挿絵が配置されている。

右記の落書が共通の話題にしているのは、明和の大火である。この明和九年の大火については、『武江年表』[3]に詳しい。そこから摘出して、大火の類焼の実情をまとめておきたい。

二月二十九日午の刻、目黒行人坂大円寺から出火して、永峰町通り、白金在町、麻布辺一円、霊南坂一筋は、西久保、桜田、霞ヶ関・虎御門・日比谷御門・桜田御門、神田橋御門など焼亡し御門内諸侯藩邸灰燼となり、日本橋から南伝馬町、北は本町石町辺、東西神田町武家方一円、小川町入口、駿河台・昌平橋筋違橋御門、外神田町々・神田社・聖堂・湯島天神社、上野仁王門・山王社・下寺残らず、車坂下谷辺、広小路・御徒町・入谷・小塚原・吉原町・千住・浅草寺・伝法院に至った。同日暮六時、本郷丸山田町より出火し、駒込・白山・うなぎ縄手・千太木入口・根津谷中感王寺・芋坂根岸に至った。翌晦日巳刻、北風に変わり、あるいは東風になって、常盤橋外の火、大伝馬町辺・馬喰町二丁目まで、堺町・葺屋町両座の芝居操芝居四座、小網町・日本橋・中橋・京橋に至った。未刻双方の火が鎮まり、此時大雨降り、風が鎮まった。

明和大火は、このような甚大な被害を江戸の町にもたらした。江戸城の南西から東、北にかけて武家屋敷、町屋をほぼ焼き尽くした。これほど大きな火災は、明暦の大火と並ぶスケールだった。そのありさまを竹田からくりの口上になぞらえて記したのがこの落書であった。江戸の町が火災で大きく変化するありさまを、からくりの変化になぞらえて表現したのである。「焼田」としたのも、「竹田」の音の類似性に掛けた洒落でもある。甚大な被害の状況を、からくり口上やからくりの変化という趣向を通して伝えようとした。落書は、ドキュメンタリーではなく、そうした趣向を通して、人びとの共時体験に基づく事件や出来事に対する共通理解を前提にした言語遊戯として表現するところにおもしろさがある。

## 三

口上本文をあらためて見てみると、冒頭から常套句が続く。

「東西〳〵」で始まり、「高ふハ御座りますれども、是より申上まする。元祖焼田火元之義、明暦以来初て御当地にて御目にかけます る。」や「扨かざりすへましたるハ、南風目黒寺と申からくり、所々へ火を付て御らふじませ。」などの冒頭句はからくり口上の常

套句である。演目名を大火に掛けて「焼田火元」「南風目黒寺」などと称している。そこから次々とからくりの変化を語るところを、風向きによって変わっていく江戸市中の火事の勢いに変換して語っており、最後は定型として、「何とばし御座りませふ」「御惣客様への御暇乞」などのご挨拶で結ぶ。

落書では、からくりの演目の人形の変化・変相になぞらえて、火事をもじった演目名で、火事で類焼する江戸市中のありさまを語っている。こうしたひとつの演目の中で展開される人形の変化・変相を表す一例を示す。これは落書の直接的な素材や典拠というわけではなく、ひとつのからくり人形の動態を口上で示した例として掲げておく。

『竹田大唐繰』④に所収されている「人間五常の臺」には、次のような口上が挿絵とともに記されている。

一オには口上人が祭文語りの人形の説明をしているところが描かれている。右手に錫杖、左手に扇をもっている。本文には「つぎに御らんに入まするはかざりおきましたる人形うたざへもんにあわせせう〳〵はたらきをつけおきましてござりまする　みぎのにんぎやうすへにいたりましてぶつぽさつとかはりまする」とある。続いて、一ウにはこの人形が変化した姿が描かれている。すなわち、本文には「さてさいしよ左りのあしはふどうめうわうとかはりまする　右のあしは多もん天とかはり左右のかいなはくわんをんせいし　たいはしやかにからいとかはりへそはやくしのるりのつぼとなりまするまたかしらは三ぞんとかはりまするなにとばしござりませうか又々もとの人形と仕御目に入まする相かはりませぬ義を御覧ニ入ましてこさりまする」とある。

まず、祭文語りの人形が歌祭文に合わせて所作をする。そして、この人形が末に仏菩薩と変化するという展開が説明されている。その変化は、左足が不動明王、右足が多聞天、左腕が観音、右腕が勢至、体は釈迦如来、臍は薬師の瑠璃の壷、頭は三尊にそれぞれ変化していくというものであった。そして、その仏菩薩に変じた姿が最後にもとの人形の姿に戻って終わるという大からくりであった。

このように次々と人形が変化していく様相を記していくのが、個々の演目のからくり口上の表現類型である。落書は、その人形の変化・変相になぞらえて、どんどん燃え広がる江戸市中の火事の状況を表した。

## 四

『落書類聚』に収められた落書をあらためて見直してみると、竹田からくりの口上のもじりになっているのは、明和大火の当て込みが最初である。なぜ、竹田からくりの口上を取り込んだのか。元来、

落書の趣向として取り込まれるものは、当然江戸市中の人びとにとって周知のものでなければならない。こうした趣向が受け入れられるのは、竹田からくりが、江戸でおおいに人気を博していたからに他ならない。ただし、当時、上方では、すでに竹本座・豊竹座も退転し、竹田一族も道頓堀の興行を取り仕切る勢いはなく、昔ながらのからくりと子供芝居を綯い交ぜた竹田芝居として興行を続けていた。それだけにかえって、地方巡業を行い、興行収益を上げていこうとしたものと考えられる。

竹田芝居の江戸興行が確認できる資料を掲げてみると、加藤曳尾庵の『我衣』[5]の寛保元年（一七四一）の条には、竹田芝居の江戸興行について触れて、演目などが記されている。二代目團十郎の『老のたのしみ』[6]にも寛保元年四月十五日夜に團十郎が竹田近江父子と会ったことが記されている。宝暦八年（一七五八）『竹田新からくり』[7]（『竹田大からくり絵尽』）が、赤本形式で残っているからくり絵本のまとまった古い資料である。竹田芝居は、その前年に江戸興行を行っており、その時『竹田大からくり』がすでに刊行され、その続編として『竹田新からくり』が刊行された。その後、竹田芝居が江戸興行を行ったのは、明和四、五（一七六七、八）年頃であり、江戸でもおおいに評判をとっていた。その時、からくり絵本として『機関千種の実生』と『若楓東雛形』の二冊[8]が相次いで刊行されている。このあたりまでが竹田芝居の活力のある時代と言える。ちなみに、次に確認できるからくり絵本としては、安永六年（一七七七）『竹田大唐繰』が知られている。それ以後も、竹田芝居は、たびたび江戸興行を行っており、そこで興行収益をあげていたものと推測される。そうした江戸での興行によって、その存在は江戸市中の多くの人びとに知れ渡っていたのであろう。明和九年の大火を当て込んだ落書も、こうした竹田からくりへの関心や興味があってのことと考えられる。

## 五

ここで注目しておきたいのは、これらの落書が、そうした竹田芝居の評判を当て込んだだけでなく、落書の体裁までも、これらのからくり絵本を丹念に真似て作られており、それをもじっていることである。

その実情を探ることで、落書の作者が、どのように落書を作っていくのか、その一端を明らかにできる事例ともなるだろう。『落書類聚』の原本は、作者矢島隆教が大正三年から四年にかけて編纂したものであり、いまは国立国会図書館に所蔵されており、デジタルコレクションとして公開されている。東京堂出版から三巻本として翻刻・刊行されているが、同書の「凡例」にも断られているとおり、

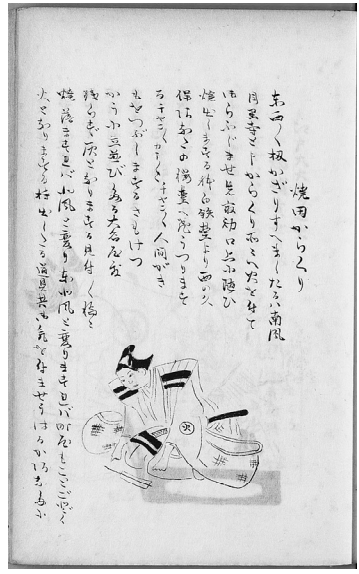
図1

『竹田新からくり』口上図

落書「焼田口上」口上図

図2

『機関千種の実生』口上図



落書「焼田からくり」口上図

組版の関係で活字と図版の位置が原状とは異なっており、落書の作者が意図したところがうまく伝えられない結果になっている場合がある。今回取り上げる竹田からくりの口上とからくりもそうしたケースである。

そこで、『落書類聚』の当該箇所を参照すると（前ページに掲出）、口上人の図が本文の中に入り込んでいることが確認できる。活字本では、本文がまとめて翻刻され、別ページに挿絵として挿入されている。そこで、『落書類聚』の口上図を検討してみたい。

「焼田口上」では、比較的年配の口上人が、舞台上手の方を見て、左手で扇を逆手に持って差し上げている図柄になっている。これをからくり絵本『竹田新からくり』の冒頭の口上図と比較すると、構図が類似していることがわかる。年配の姿で描かれているのは、この口上人が当時の三代目竹田近江大掾であり、その舞台姿と考えられる。落書はそこまではわからずとも、この口上図を参照している可能性が高いことを示すことになっている。ただし、落書の口上文は、からくり絵本の口上本文の内容とは直接つながるものではない。

この構図は、口上人の舞台姿としては珍しいものであり、着物の柄は異なるものの、落書がからくり絵本を模写したような構図になっている。おそらく、こうしたからくり絵本の口上図をそのまま利用して、それらしく見せる工夫がなされていたのであろう。おそらく、「焼田口上」の構図は、『竹田新からくり』のからくり絵本の口上図を真似て書かれたものと考えられる。

「焼田からくり」の口上図では、裃の若衆姿の若い口上人が、舞台下手の方を見て、客席に両手をついてご挨拶をしている。扇は前に横向きに置いている。『機関千種の実生』の口上図とは、裃の若衆姿と髪型、着物の柄、脇差しの位置に至るまで一致している。この口上人は、まだ若い竹田縫之助である。落書とは、右手に逆さに構えた扇をもっているところだけが相違している。この口上人の姿は、からくり絵本を模写したものと言ってもいいのではないか。この落書の口上本文は次の丁にまたがっている点が構図としてはずれているが、その描写の細かな一致は両者の直接的な関係を示しているのだろう。

からくり絵本『竹田新からくり』、『機関千種の実生』の両書の冒頭の口上図は、この時の興行全般にわたるご挨拶であり、興行の趣旨を伝えるものである。それに対して落書の場合は、個々のからくりの演目についての口上文になっている。挿絵には、からくり絵本の口上図を用いながらも、口上本文は個々の演目の口上文をもじって制作していることになる。このように落書の作者はそれなりに手の込んだ作り方で、趣向を凝らしていたことがわかる。

六

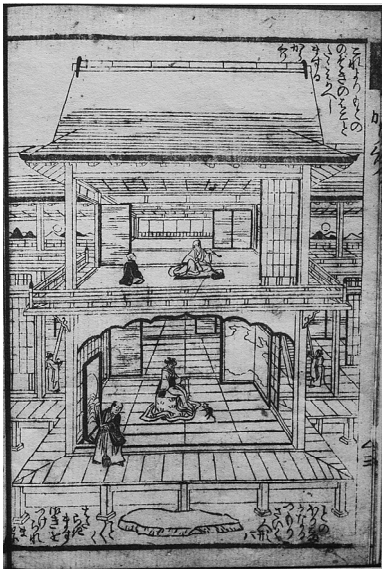
しかも、同書が次に掲げるからくりの舞台図との類似も見逃せない。『落書類聚』には、小さな鐘を打つ法師の人形が載るからくり台と大火事に見舞われる江戸の町の景色を描いたからくり台が並記されている。しかも、法師の人形から大火事のからくりへと吹き出しが書き込まれている。

これと類似したからくりが『機関千種の実生』に収められている。すなわち、第一の「大からくり　邯鄲栄花春」であり、のぞきからくりの鐘を打つ法師の姿はほぼ一致しており、落書がからくり絵本の類似する挿絵を下敷きにしている可能性を示している。このから

図3

落書「焼田からくり」挿絵

図4



『機関千種の実生』「邯鄲栄花春」舞台図

くりの口上本文を掲げる。

かざりおきましたるのぞきがらくりは　わづかのはこの内へ千ぜうじきをつもりましたるさいく　さいしよはほうしの人形かねをうちまするとはここと〳〵ひらけひろがりまして　千ぜうじきのゑんとかはり左右の子供は東西金銀の山こがねしろかねの日りん月りんとなりまする　さてはるかむかふくわとう口のきぬをまきあけまするれば　女らうこたつの上にてねこをそばやかしまする　又さゆうのはしごをのぼり　きうじ仕まする　此長らうかこと〳〵くはきそうぢいたしまする（三オ）　これよりのぞきのはことたゝみかへしまするからくり　ことのほかこまかなるつもりさいく　人形はこと〳〵くはたらきます御きをつけられませふ（三ウ）

このからくりは小さいのぞきの箱の中に千畳敷を仕組んだからくりである。

最初は、のぞきの箱の上の法師の人形が鉦を打つと、箱が開けて千畳敷の座敷と変わる。のぞきの箱の穴から覗いていた左右の子供は日輪月輪と変わる。千畳敷の座敷の火燈口の絹を巻き上げると、女郎が炬燵の上で猫を戯れつかせている。また、左右の梯子を登り、給仕する人形、長廊下を掃きそうじする人形がそれぞれに所作をする。二階の障子を開けると、主人が辺りを見回し、煙草を吸う。最後に、元ののぞきの箱に畳み返される。



つまり、のぞきの箱が開いて、箱のなかで展開されていた千畳敷の座敷の様子を見せた後、再び、覗きの箱にもどるというからくりであり、覗きの穴を覗いていた童子が見た千畳敷の座敷を舞台化して見せるという趣向であった。

のぞきのからくりでは、法師が鐘を打つというのが常套だったのだろうか。のぞきの箱の上に人形が描かれている図としては、勝春朗画の黄表紙『野曾喜伽羅久里義経山入』（天明四年）を掲げることができる。[9] 法師の人形が鐘を打つ後ろ姿が描かれており、のぞきの箱の上に設けられた棚板の上に人形がセットされている。ふたりの童子が穴をのぞき込んでいる。本文には、「さて千ぢやうじきとかはりますれば　四てんわうのめん〳〵のこらず相つめまする　これもやぶんのていとかわりますれは　しよくだいのこらずひがとほりまする　このきおめにとまりますれば　せんのかたはおかはり〳〵　あれみなあかりがとぼつたよ」とある。

竹田からくりの千畳敷では、最後に火が灯る。絵尽し『身延山恵方伝記』の最後に千畳敷のからくりの絵が収められおり、「数万のしやうくたい（燭台カ）見事〳〵」とある。

また、英一蝶『一蝶画譜』[10]（明和七年の序文あり）所収の「あめ売」にも、のぞきの箱が描かれている。そこには、和蘭陀風の衣裳を着たあめ売りが描かれており、喇叭を吹いている中国風の人形が

のぞきの箱の上に描かれている。このようにのぞきの箱の上に人形を飾り、音を鳴らし、からくりの合図にするのが、のぞきからくりのひとつの形態だったのかもしれない。

## 七

このように「邯鄲栄花春」では、のぞきからくりの箱の上に鐘打ちの法師が描かれているのに対して、落書の方は法師の人形が別のからくり台にセットされているところが相違する。「邯鄲栄花春」では、のぞきの箱が開いて、箱の中に見える千畳敷の二階建て座敷で種々の人形の所作が演じられる。のぞきの箱の中から吹き出しが出ており、次の座敷へと変化していくことが吹き出しで示されている。つまり、この吹き出しは、のぞきの箱が開いて、座敷に変化することを暗示している。このように変化・変相を表す吹き出しは、からくりの絵画資料に見られる表現類型である。ただし、三丁表から裏にかけて、吹き出しが連続になるように描かれた事例はからくり絵本の中でも珍しい。

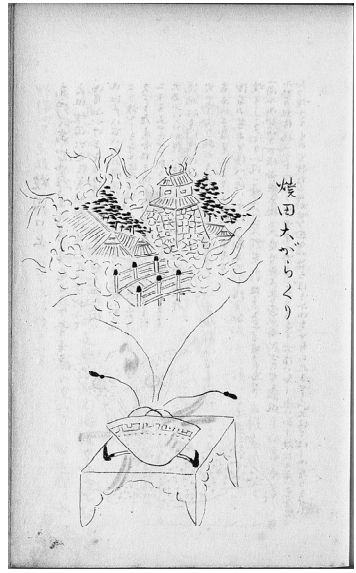
それに対して『落書類聚』の落書の図の吹き出しでは、何が変化するのかが曖昧であり、法師が変化するように見えてしまう。通常のからくりの絵画資料では、こうした構図では、大人形が変化することを意味しており、別の変化・変相を表すことになる。その意味では、落書の作者が「邯鄲栄花春」のからくりの動態を正しく把握していたとは考えられない。むしろ、それらしく模写することに主眼があったのだろう。もちろん、実際にからくりを見たとは考えにくい。

とは言うものの、落書のねらいは、この法師人形の鐘打ちの所作に、火事を知らせる半鐘を打つという意味を掛けて重層的に表現することにあったのだろう。いずれにせよ、鐘を打つ法師と吹き出しが、落書とからくり絵本、両者の関係の深いことを示していることに変わりはない。わざわざ吹き出しまで真似ている点は注目してよいだろう。このように特定の演目を記した絵本の挿絵を下敷きにして落書を書くというのは、作者のこの趣向に対する思い入れを強く感じさせる

## 八

ここで、もう一点のからくりの挿絵に目を転じてみると、大きな蛤の口が開いて、大火事の勢いが江戸城の御門に迫っている様子が描かれている。ちなみに、この挿絵は紙面の都合か口上図の前に収載されている。挿絵には、「焼田大がらくり」と記されている。この落書も、『竹田新からくり』と類似した冒頭の口上図を持っていることからいえば、これも大蛤が開いて、そこから何ものかが現れ

図5




落書「焼田口上」挿絵

るからくりが演じられたものと推測される。だが、管見にいる限り、この演目は竹田からくりの資料のなかに見出すことができない。山東京伝の黄表紙『小人国毀桜』[11]には、「蛤貝の中に覗機関を仕込みたるに等しく」とあり、こうした蛤の貝が開いて、そこから別種のからくりが展開するという演目があった可能性が高い。現存からくりのなかでは、「浦島」の乙姫の登場に際して、大きな貝が左右に開くという演技が見出せる。浦島の演技は、乙姫から玉手箱を受け取り、それを開けて老人になるまでの一連の場面を貝のからくりの前で演じる。ここは樋式のからくりで演じられる（愛知県半田市亀崎など）。また、果実が割れて中からからくり人形が登場する演技も確認できる（大津祭西王母山）。ただし、落書の作者の意図としては、火事で焼け出された焼き蛤という意味を重層化させて大蛤の趣向と洒落ていたのかもしれない。こうした演技・演出のからくりが、竹田からくりの演目として上演されていた可能性を想定させる落書であり、その意味では、竹田からくりの研究資料としても注目される落書と言える。

この二点の落書を通して、竹田からくりの口上をもじった落書を作る際に、具体的な素材を丹念になぞらえて制作する場合もあり、からくり絵本の口上図やからくり舞台図の構図や形態まで真似たり、踏まえたりする姿勢があることを明らかにした。これは特殊なケースかもしれないが、挿絵を伴う落書の場合、それらを精査していくことで、落書の作者のねらいが具体的に把握できることもあるだろう。従来、落書研究が落首の分析に重点が置かれてきたが、改めて多種多様な落書の表現に則した読みが必要になってくるだろう。

末筆ながら、写真の掲載をお許し頂いた国立国会図書館・東京都立中央図書館に深謝申し上げます。

注

① 『江戸時代落書類聚』上中下三巻（東京同出版）昭和五十九年五月。
② 鈴木棠三「落書概説」『江戸時代落書類聚』。
③ 斎藤月岑著金子光晴校訂『増訂武江年表1』（平凡社）昭和五十九年四月（初版昭和四十三年六月）。

④ 大東急記念文庫所蔵。安永六年刊。
⑤『燕石十種』第一巻（中央公論社）昭和五十四年三月。
⑥『燕石十種』第五巻（中央公論社）昭和五十五年三月。
⑦ 国立国会図書館所蔵。
⑧ 東京都立中央図書館所蔵。
⑨ 東京都立中央図書館所蔵。
⑩ 国立国会図書館所蔵。
⑪『山東京伝全集』第三巻所収（ぺりかん社）平成十三年三月。